

光村図書・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

○7「私の話を聞いてね」

ページ・エドワーズさんは、右手指の奇形を隠すことなくインスタに披露。「一人一人違う、だれ一人として同じではない」と堂々としたもの。

○8「席を譲ったけれど」

席を譲った老人から「ふざけるな！」と怒られた中学生が新聞投稿し、111通もの反応が来る。そのうち4つを紹介している。リアルな投稿は教材として面白いと思う。

9「一粒の種」

バレーボール部の応援ボランティア団を立ち上げる話。展開が順調すぎて不自然だが、トップダウンではなく、一人の転校生の呼びかけによるボトムアップ、強制ではなく任意参加として、押しつけがましさを避けている。前向きな青春映画風ストーリーは、道徳教科書では意外にもあまりない。

○10「魚の涙」

メジナは狭い水槽に入れると、必ず1匹を仲間外れにして攻撃してしまう。広い海では起こらないのに。これはイジメの本質を表している。狭さは、空間的なものだけでなく、価値観や個性など内心の自由の許容範囲を現す。

13「学習机」

誤配達で客の子供を悲しませてしまい、お詫びに伺う。礼儀の徳目向けとして。

p. 86「ネットの書き込み、大丈夫？」

直前の14「言葉の向こうに」のフォロー。SNSなどで、自分や友達へのネガティブ書き込みがあった場合に、具体的な対応を明示しているのは良い。

○16「エルマおばあさんからの『最後の贈り物』」

立派な死に際。全ての準備を整えて安らかに、家族を悲しませることなく、「死が最後の贈り物」と言わせた。素晴らしい教材だが、中学生にはまだ分からないだろうし、分かってほしくもないような・・・。

○17「やっぱり樹里は」

言うべきことを言う樹里がかっこ良い。イジイジしたありがちな生徒像ではなく、はっきりものを言う人物像を外連味なく活躍させるのは、ありそうでない教材。

18「僕たちの未来」

植林のボランティアに参加。主催者の漁師から、山からの養分が海を豊かにすると、植林の意義を教わる。環境問題としても素直に読める教材。

○19「私が働く理由」

オリジナリティのある仕事、付加価値の高い仕事をしている2人と、その他6人、男女4人ずつを紹介。いろいろな可能性がある、未来を少しは明るく、生徒に感じてもらえるかな。他社に多く見られるパターン「どんな仕事でも頑張っ、努力して、やりがいを見いだせ」に比べると、ほっとして救われる思いで読める。

21 「なおしもん」

輪島塗の工程写真解説が良い息抜きになる。伝統を大切にしようと言うなら、まずその伝統を十分に知ることが第一歩なので、これは良い見本。

○ p. 128 「なんだろうなんだろう『正義』って、なんだろう」

「正義は人によって違う」、「正義のために戦争をやる」とかが面白い！

○ 24 「異文化の人々と共に生きる」

討論の勧めと p.148のフォロー「考えの違いを乗り越える」が良い。

31 「親友」

マフラーを編んだ僕、フォローしてくれた美咲は男子とサッカーをする。中学に入り、制服のスカートをはいた美咲とはサッカーが出来ない……。あまり見ないような教材で、生徒はかなり関心をもつのでは。

全体について

全般に前向きで明るい教材が多く、あるべき生徒像をスラッと提示したり、ほのぼの調も多い。生徒の自主的な意思でストーリー展開させたり、あるいはマンガを使ったりで、押しつけがましさをなるべく感じさせないようにしている。気が重くなる教材は少なく、これはダメと思われる教材もなく、読んでまあ楽しい教科書ではないか。

礼儀の徳目は家具屋のお詫びで済ませるなど、文科省指導要領に対して、最も面従腹背と言える。後半1/3は平凡なのが、少し物足りない。

(+8)

日本文教出版・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

4 「『愛情貯金』を始めませんか」

挨拶は「互いの存在を確認したことを示す基本動作」との定義が良い。
私見として、(強制ではない)自然な挨拶はまず「個人の尊重」から。

○ 5 「魚の涙」

メジナという魚は狭い水槽に入れると、必ず1匹を仲間外れにして攻撃してしまう。広い海では起こらないのに。これはイジメの本質を表している。狭さは、空間的なものだけでなく、価値観や個性など内心の自由の許容範囲を現す。

▼ p. 34 「イジメの背景と心の状況」の分析は表層的で、本質を捉えていないと思う。

私見として、イジメを起こす本質は「集団親和・均質化圧力の下で、外れ者を叩く」こと。学校教育そのものに集団親和・均質化の側面があるので、イジメの原因が内在している。

イジメをなくす本質は「個人の尊重」で、「みんな違ってみんな良い」、「だれしものがかけがえのない存在」を徹底的に認識・理解させること。

6 「近くにいた友」

やる気あるのに野球がなかなか上達しない主人公に、匿名の中傷メールが届く。友達の信也を疑い突っかかるが、それは誤解。しかし信也の適切な対応で救われる。

p. 43のフォローで「怒りの感情」問題として扱われているが、はっきり自己主張することをまずは良しとしてほしい。当人が怒りをぶつけたとはいえ、信也もすぐに事態を認識できたのは悪くない。黙ってウジウジするよりずっとまし。

○ 7 「トマトとメロン」

トマトとメロンは個性のたとえ。外見で違いが見えれば、だれも一緒にはしない。
外見と同じくらいに、内心の違いもあるのだと、生徒に分かってもらえるだろうか？

○ 13 「部活の帰り」

人助けの上手くいった例。テキパキ行動する生徒が登場するのが良い。

▼ 14 「私は清掃のプロとなる」

新津春子さんは中国残留日本人孤児の娘で、一家で帰国。中国では裕福なほうだったのに、日本では家族全員で働かないと生活できない、高校の学費は自分で働いて用意、日本語が上手くないので、仕事は清掃ぐらいしかない、などと詳しく事情を書いてある。それでも本人は健気に努力して、カリスマ清掃員と呼ばれるまでになる。

率直な感想は、日本ってヒドい国だ、中国に居続けていれば、ひょっとして清掃会社の社長さんになっていたかも・・・。

▼ 16 「むかで競走」

運動の苦手な一宏君は、むかで競走ではいわば「足手まとい」だが、仲間が特訓に特訓を重ねて成

功話に仕立てている。もし一宏君本人が望むなら良い話なのだが、本文中に彼の発言も内面の記述も一切ない。記述は、練習が上手いかず「少し後ろにいた一宏は、悲しそうに下を向いたままだった」、競走が終わった時に「無口でいつも下を向いている一宏が笑っていた」の2つのみ。一宏君の意思があるのか、無いのかさえも分からない。

もし怪我したり、ビリだったら、どうするのだろうか？ どうして、全員が同じことをやり、同じレベルにならなければいけないのか？ 伝統というだけで思考停止にしていないか？

実社会の仕事で、全員が同じ行動をするのは（臨時の雑務以外は）思い浮かばない。もしそういう仕事があれば、直ぐに機械化、IT化される。ほとんどの仕事はチームでやるが、分担して各自が責任を持つ。学校でやりたがる全員同一行動は、いったい何が目的？

○ 21 「富士山から変えていく」

エベレストで日本隊が残した大量のゴミや、富士山はゴミと屎尿垂れ流しで日本一汚い山と、世界に広く知れわたっていることを認識し、筆者・野口健氏が一念発起してクリーン化運動を展開。5合目から上はゴミがなくなり、垂れ流しも最近ようやく止まった。日本の悪い面を率直に認めての対策改善。

▼ 24 「家族と支え合うなかで」

出典は青少年育成国民会議主催のスピーチ大会の総理大臣賞受賞作品。介護の自助化を推奨する国策に沿った内容であり、「国の教育への介入」そのものではありませんか？

▼ 30 「自分だけ「余り」になってしまう…」

余り（一人）になることを恐れる心情への共感と、徐々に克服するように優しく語る教材。

自立できていない、依存心が強い、集団親和・・・は日本人の悪い側面だ。なぜそうなるのか？

保育所、幼稚園、小学校と常に集団で扱われ、一人で行動する経験が少ないのか？

いずれにせよ、一人できつさとやる生徒のモデル像を、より多く提示すべきだと思う。自立した人格のイメージをもっと豊富に与えるべきだ。だからこの教材はマイナスだと思う。

35 「いつわりのバイオリン」

弟子が作ったバイオリンに、自分のラベルを貼ってしまったフランク。部下の成果を上司が横取りする例は、企業や学術研究でもしばしば起こる。内部告発などで適正に対処されるべきであるが、この教材ではフランクの内面の弱さのみを取り上げている。ラベル偽装の不道徳を見逃したままでいいのか？

全体について

好ましい題材も目立つのに、古めかしい価値観を押しつける題材はより多く、全体としてはマイナスになる。イジメに力を入れているようだが、5や7の象徴的な教材は良いのに、具体的なものはむしろマイナスになるのではないかと懸念される。

▼別冊に授業内容に関する複数の5段階評価があり、ネガティブに評価。何が狙いか？

(+4-6=-2)

東京書籍・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

▼2「あいさつを交わして」

見知らぬ大人へ挨拶する例を取り上げているが、誘拐や性犯罪に巻き込まれる懸念があり、推奨すべきではない。

▼3「選手に選ばれて」

足の速いA君は、クラス対抗リレー選手に投票で選ばれるが、勉強を理由に固辞。しかし「いったん選ばれた以上、出場の義務がある」と説得されて、困惑する。

主題は「権利と義務を考えて」なので、個人の自由とクラスでの選出を、権利と義務に当て嵌めようとしているようだが、これは間違った珍妙な対応付けである。一般に「権利と義務はセット」ではない。

○4「自分の性格が大嫌い！」中村うさぎ

「短所長所は同じ部分の裏表」。

▼6「傍観者でいいのか」

(1) イジメっ子 (+取り巻き) とイジメられっ子の嫌なやり取りをやきもきしながらも日々傍観、
(2) 周囲をいろいろ引っ掻き回す変わった子が次第に無視されていくのを「いくらサオリが悪くても、みんなでイジめるのはいけないなあ」と。

イジメのありがちな上記2例が提示され、さあ考えましょう、話し合おうとなるが、明確な望ましい対処を示していない。もしこの授業を休んだ子が教科書を読むだけなら、「イジメを止めろとなかなか言えないもんだよな、こういう子はいじめられても仕方ないよな」という印象で終わるのではないか。ありがちな例を半端に提示する教材は、イジメ防止に役立たないと思うし、助長する可能性さえあるのではないか。

イジメを止めろとスラッと言う子や、変わった子でもこだわりなく相手する子を、もっと多く教科書に登場させてほしい。好ましい例を教科書に提示してほしい。

▼10「新しいプライド」

60才でパート、夫もリストラ(?)でアルバイトと、妙にリアルな貧困日本の設定を中学生に突きつけたいしてほしい。厳しい境遇でも頑張れ、やりがいを見つけろと、押しつけられる日本。夢がなさ過ぎる。未来が暗くなる。清掃の仕事例が多すぎる。

p. 64「あなたはひかり」

「そのままのあなたが好きよ」が良いのだが、短い詩なのでその意味を十分説明してもらえないだろうなど。実際、p. 65のフォローは核心に触れず、むしろぼやかしているような。

14「母はおしいれ」

たとえば独創的で面白いが、よく分からない。主題は「明るい家庭を作るため」で、父は？

▼15「班での出来事」

内容以前に、文章がとても分かりにくい。読み返しても、展開も主題も掴めない。give up!

18「ゴミ箱をもっと増やして」

4つの投書を引用して、いろいろな意見を具体的に示すのは良い。

○19「どうせ無理という言葉に負けない」

「NASAより宇宙に近い町工場」の植松努氏の話。

「国家主導の世界初はこの世にないんです。世界初はすべて、個人が自腹でやってきました。・・・
全ての人には世界を変える可能性があるのです。」 実際その通りだと思う。意気やよし！

25「全校一を目指して」

アルミ缶回収、今年はクラスで8千個の目標を立てた。順調な滑り出しだったが、活動は次第に停滞してピンチ。再度、全員で話し合いの方向に。

賛成多数で決めたことなのに、途中で上手くいかなくなるのは、実社会でもしょっちゅうあること。非協力的な2名が悪いと言いたげな誘導はさておき、決めたときの賛成、反対意見はどうだったか、当初の見込みとどこが違ったか、さあどうすべきか・・・。

上手く指導すれば、民主主義の意思決定を考えるととても良い教材になりそう。議事録とかの重要性も認識できるかも。

27「花に寄せて」

星野富弘氏。頸椎損傷で全身麻痺。口に筆で描く絵が、素晴らしい芸術作品。

○付録4「いじめっ子の気持ち」

「みんなと違うというだけで」イジめる、「それに付いていくみんなの責任」とか本質を突いたことが書いてある。「違いをそのまま認めよ」とか「個人の尊重」らしきことにも言及してある。これを教科書の始めに載せて、生徒の身の回りに当て嵌めて話し合いさせるほうが、教材6よりはるかに良いと思う。

全体について

特に良い付録4と、特に好ましくない10以外は、まあ無難な教材が多いように感じる。

▼ただし巻末の「自分の学びをふり返ろう」は自己とはいえ数値評価につながりかねないもので、ネガティブ評価。

(+3-6=-3)

廣濟堂あかつき・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

2「目標は小刻みに」

テクニクとしては参考になる。ただし何事も頑張らなければいけないという強迫観念を押しつけることのないように。本人がやりたければ、自ずと頑張るのだから。

5「いつわりのバイオリン」

弟子が作ったバイオリンに、自分のラベルを貼ってしまったフランク。部下の成果を上司が横取りする例は、企業や学術研究でもしばしば起こる。内部告発などで適正に対処されるべきであるが、この教材ではフランクの内面の弱さのみを取り上げている。ラベル偽装の不道徳を見逃したままでいいのか？

▼6「アイツ」

かなりの出血、痛くて歩けないほどなのに、先生は放置していたという状況設定はマズいでしょう。現実味がなくなる。

8「釣り竿の思い出」

釣りに熱中しすぎて約束の帰宅時間に遅れ、入院中のいとこのお見舞いに行けず。母親は買い与えた大事な釣り竿をへし折る。

学研教育みらい1・6に同じ題材があるが、こちらではいとこは急死しないので、少し救われる。しかしそうすると、母親が釣り竿を折る感情的暴走がさらに不自然になる。憧れの釣り竿が、もったいなさ過ぎる。

▼9「ヨシト」

「周りに合わすことや、その場の雰囲気を感じて振る舞うことが苦手だった。・・・何事にもマイペースなヨシトは・・・」との記述は大問題。あたかも、集団に親和しない個性的な子供は、イジメに遭いやすいと教科書で認めている。よほどうまく指導はしないと、生徒には「集団親和的でないといじめられる」という教訓だけが刷り込まれる。ならば、教科書がイジメを助長し、個性を萎縮させているも同然ではないか。

11「木箱の中の鉛筆」

中学時代の父は、技量で軍楽隊に選抜されたと思い込み（実は肺活量）、自信を深めて上手くなった。これは話の中盤部分だが、モチベーションを高めてもらうことで人は進歩する例として、むしろこちらのほうが重要ではないか。

○14「島耕作」

電車内で席を譲れ、譲らないのやり取り。大人を題材にすると、子供が大人を客観的、批判的に見る目を養えるのではないか。大人の内心も、実は子供ときほど違いがないことが分かるはず。

○17「加山さんの願い」

これも大人の例。熟年の訪問ボランティアが、意外に歓迎されない話で面白い。思っていることを

率直に言うのもありだな、と生徒に受け取ってもらえれば良いのだが。

▼ 20 「人に迷惑をかけなければいいのか？」

2つの問題が含まれる（ガラスの破片を放置、通り抜け禁止を守らない）。

前者は論外で、直ぐに報告して片付けせよと厳しく咎めるべき。しかし後者は、ルールを守るか否かの限定された二律背反ではなく、他の可能性を探る展開がほしい。所有者と掛け合い限定的許可をお願いするとか、他にも面白い発想が出てこないものか。

大人になって、仕事ができる人はなんとか上手い手を捻り出すものだ。

▼ 22 「吾一と京造」

事情を正直にスラッと説明すれば良いのに、奇妙に黙ってしまう。なぜ言えないのか？ 主張しないのか？ 「よくあること、仕方ないよね」と生徒は受け取りかねない。言うべき事は言う、ちゃんと自己主張できる人物像を、教科書には描いてほしい。沈黙は「禁」。

山本有三の「路傍の石」全体としては、吾一が黙っていることが重要な伏線かと思われるが、ここだけを切り出して道德の教材に使うのはどうかと思う。

○ 24 「ネット将棋」

ネットは顔が見えないからとズルばかりする子と、お手本の子とを対比させた構成が良い。

○ 25 「ある日のバッターボックス」

足の悪い子のために、子供達だけでルール（指名代打+代走）を創造！

▼ 27 「午前一時四十分」

極端な過酷すぎる勤労観の押しつけ。新聞配達はせめてバイクに乗れる人に！ 集金は自動振り込みで！ 10年一日のやり方では、日本の労働生産性は向上しない。84才でも働かざるを得ないなら、若者が未来に希望を持ってない。教科書で日本を暗くしないで！！

▼ 31 「よみがえった良心」

O. ヘンリーらしいが、やはり逮捕されないと、遵法精神に背く。道德の教科書としてはマズいのでは？ 刑を軽くする嘆願署名運動・・・で終わるのが予定調和か。

▼ 35 「二枚の写真」

あまりに模範的な行いが淀みなく進行し、不自然。

全体について

好ましい教材もあるのに、それ以上に不適切と思われるものが多い。特に「ヨシト」と「午前一時四十分」は良くない。イジメを助長し、未来を暗くする。

▼▼副読本の5段階自己評価表が最悪。生徒には一瞬たりとも見せたくない！ これだけでネガティブ評価2つつ分。

(+4-9=-5)

教育出版・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

▼2「おはよう」

出典は、1889年生まれの西尾実氏の1959年の著作『私たちはどう生きるか 8』。

もしAIロボットが顔認識して深々とお辞儀しつつ「西尾先生、おはようございます！」と挨拶したならば、「心の真実が、そのまま身のかまえになり、声になった本当の挨拶である！」と氏は感激されるであろうか？ そんな皮肉を書きたくなるほど、表層的な形を重視しすぎと思える。

▼4「不自然な独り言」

盲人が歩道を渡ろうとするのに、声を掛けることが出来ずに、もどかしい場面を長々と。

ありがちな例なので、まとめが半端だと、「なかなか出来ないものだ」という印象だけが残る懸念がある。スッと行動する生徒（お手本）も、適当なタイミングで登場させてほしい。

6「『どうせ無理』をなくしたい」

「NASAより宇宙に近い町工場」の植松努氏の話で、東京書籍1・19と同じ題材なのに、こちらの印象は弱い。いろいろ詳しく書きすぎて、主題がぼやけているのではないか。

7「「いじり」？「いじめ」？」

コメディアンに似ているの一言で、傷ついて転校までするかな？

8「富士山を守っていくために」

ほぼ同じテーマの日本文教出版1・21「富士山から変えていく」と比べると、こちらは面白くない。地学的な解説、文化遺産としての側面、自然遺産として拒絶された理由であるゴミ/屎尿処理問題と、主題が絞られていないためか。

10「イチロー」

人からどう思われようと、自分が決めてその通りに実行するイチローは、自己確立された個人の好例。大いに推奨されるべき人物像。しかし毎日規則正しくやることを特に強調した解説は、最重要ポイントを外していると思う。

○12「選ぶということ」

生徒会の役員改選のクラス内予備選挙。候補者揃っての方針説明会、そしてたぶん引き続いての質問と、実際の選挙でもやってほしいと思う。主権者教育として、良い教材。棄権を否定的に書いているのも良い。

▼15「ルールとマナー」

ネット書き込みの例で、「盗んだり、万引きさせたり・・・」と名誉毀損になりそうなことを教科書に堂々と載せないでほしい！ バツで上書きするとか、しっかり説明するとかで、明瞭に否定しないと悪い見本になる。

▼16「けやき中を誇りに」

学校伝統の合唱コンクールとはいえ、全員が同じことをやらねばならないのか？ クラス対抗とか同じ土俵で競争させられるのか・・・等々、息苦しさをを感じる。ひねりのない予定調和的なストーリー展開も、面白くない。伝統という言葉は、「思考停止、やるしかない」と思わせるのに便利。実社会の仕事で、全員が同じ行動をするのは（臨時の雑務以外は）思い浮かばない。もしそういう仕事があれば、直ぐに機械化、IT化される。ほとんどの仕事はチームでやるが、分担して各自が責任を持つ。

○ 17 「ショートパンツ初体験 in 米国」

米国では義足であることを隠さない、「障害もありのままに認める」。子供が無邪気に障害について質問してくるのも良い。

▼ 18 「あなたならどうしますか」

1番目はコンパスを隠すイタズラ、2番目はバレーボール部の1年生まとめ役に対するメンバーの心理的反発。これらを話し合っただけで考えましようとの教材。

（中学生にとっても）些末でくだらない題材ではないだろうか。私が生徒なら、求められそうな意見を数件さっさと出して、残り時間は遊ぶ。もっと面白く、関心を引く、ためになりそうな題材はないのでしょうか？

▼ 19 「もったいない」

モノが希少なれば、地域/時代を問わず、大事にするのは当たり前で、日本独自ではない。そういう主旨のことも書いてある。しかるに「日本独特の精神世界」とか「日本人の美徳」とか異様に持ち上げる。でも、現代日本の大量生産/消費/廃棄の問題に直接寄与する訳ではない。

勿体ぶった書き方にしては、内容空疎で、何を言いたいのか分からない。再利用の具体例をいくつか示すだけ？

20 「いのちを考える」 菊田文夫

「人間はたくさんの動物や植物のいのちを奪い続けることによって快適な生活を送っているのです」

▼ 22 「幸せな仕事って」

中一生によるインタビュー形式そのものにリアリティが全く感じられないので、全体がありきたりの作り物に思えてしまう。

27 「チョコの行方」

「付き合う」とかにつき、男女がまともに話す教材は珍しいのではないか。生徒の関心高そう。

全体について

作者記載なしの教材が多い。面白いはずの教材も、書きすぎてインパクトが弱い。文章か、内容か、リアリティか、曰く言い難いが、全体として読んで面白くないものが多い。

▼巻末にある3段階自己評価は、ネガティブに評価。

(+2-8=-6)

学研教育みらい・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

▼3「挨拶しますか、しませんか」

子供が知らない大人に声を掛ける例を取り上げているが、誘拐や性犯罪などに巻き込まれる懸念があり、推奨すべきではない。登山では同じ目的の仲間と見なせる。マンション住人は仲間だが、外部者が勝手に入れる場合は厄介。

▼p. 23「日本人の礼儀」

新渡戸稲造の論（「武士道」が日本人の道徳や正義を形成）には賛成できない。それは人口の10%への建前的な教えであり、大日本帝国の崩壊以降は、学校教育とは無縁であるべきもの。江戸時代の日本人はむしろ宗教的であり、神道（八百万の神、自然への畏敬）と仏教（全員が檀家、特に死生観）のベースは、現代も残っている。

▼4「うわさで決めるの？」

LINEのやり取りで、ありがちな悪い例。あるべき対応を明確に書いてないので、「そんなものだ、仕方ない」と生徒が受け取り、逆効果になる懸念がある。

6「釣り竿の思い出」

釣りに熱中しすぎて約束の帰宅時間に遅れ、お見舞いに行くはずだったのに、入院中のいとは急死。母親は買い与えた大事な釣り竿をへし折る。当人の自制心の問題として取り上げられているが、それほど重篤な状態であることも認識させずに、釣りに行かせた親にむしろ問題ありと感じる。

○8「バスと赤ちゃん」

2つのエピソードとも美談！ p. 45の「黙っているのは（共犯で）逮捕」の創作ジョークはウケる。イジメなどを念頭と思われるが、政治家/官僚のウソ、無法ぶりにも目を向けさせてほしい。

▼11「西山先生へ」

「どんなに辛くとも必死で食らいつく」で剣道部を続けられたのはご同慶だが、高校では吹奏楽部なので、やはり剣道を好きになれなかったのか。夏目漱石の言葉で「がーん」とくる唐突さが、読み直しても分からない。挫折の経験をすでに持つ生徒にとっては、辛くても食らいついて続けるべしとの価値観の押しつけは、きつ〜い嫌みになることだろう。やりたいことを、やればよい。

○14「ネット将棋」

ネットは顔が見えないからとズルばかりする子と、お手本の子とを対比させた構成が良い。

▼16「キャッチアンドリリース」

自治体によってルールが異なるものを、なぜ道徳の教材にするのか？生態系の問題なので、自然科学系の教科で扱うべき。環境問題も一般に広い知識が必要で、道徳には馴染まない。

27「日本の心と技」

狂言、琵琶の写真を載せているが、生で見た中学生がどれだけ居ることか？「伝統」を実際に見たこともなければ、実感も湧かないと思う。ところで、ほとんどの伝統は明治維新以前に形成されたものであることを指摘し、なぜそうなのかを考えさせるのも面白い。

28 「イチローの軌跡」

イチローは自己確立した個人の好例である。集団親和や付和雷同に流れる日本では珍しいタイプで、お手本として大いに推奨されるべき。イチローがイチローたる最重要ポイントをきっちり書かずして、結果としての自己肯定感だけを取り上げて、教材の意義は半減する。ノーベル賞受賞者とか世界で活躍する日本人は、イチロータイプが多い。

▼ 30 「吾一と京造」

事情を正直にスラッと説明すれば良いのに、奇妙に黙ってしまう。なぜ言えないのか？主張しないのか？「よくあること、仕方ないよね」と生徒は受け取りかねない。言うべき事は言う、ちゃんと自己主張できる人物像を、教科書には描いてほしい。沈黙は「禁」。

山本有三の「路傍の石」全体としては、吾一が黙っていることが重要な伏線かと思われるが、ここだけを切り出して道徳の教材に使うのはどうかと思う。

▼ p. 155 「してはいけないこと」に「権利を主張する一方で、義務をなおざりにするのはダメ」という主旨の記述があるが、憲法上の権利と法律遵守の義務を同列、混同しているように見える。とすれば、大きな錯誤。

▼ 33 「明かりの下の燭台」

東洋の魔女のマネージャ・鈴木美枝子さんの話。逆らえない上司から役割を強要され、泣きながら渋々引き受けて、それでも頑張って・・・と古い日本流。もちろん裏方は必要だが、進んで引き受ける人を見つけるべし。或いはこの例では、本人がその気になるまで待ってほしい。

全体について

古くからありそうな教材は、カビが生えたような価値観の押しつけを感じる。ポジティブ評価の2つは、比較的新しい教材と思われる。

(+2-8=-6)

学校図書・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

○ 1 「誰も知らない」

通学バス停までの200mを40分も掛けて毎日通う障害児のありのままの姿を、暖かく描いたもの。障害者スポーツ選手のすごい話よりも、こちらのほうが共感を得られるのでは。

▼ 3 「博史のブログ」

ブログで同級生のカンニングをばらしたり、関連してウソも書くとかは、名誉毀損的な行為であり、自由な考えや行動からは全く逸脱していることを、もっと明確に書くべき。

▼ 7 「キャッチボール」

ルールを守らない子に因果応報。状況設定がわざとらしく、現実味がない。

8 「いつわりのバイオリン」

弟子が作ったバイオリンに、自分のラベルを貼ってしまったフランク。部下の成果を上司が横取りする例は、企業や学術研究でもしばしば起こる。内部告発などで適正に対処されるべきであるが、この教材ではフランクの内面の弱さのみを取り上げている。ラベル偽装の不道徳を見逃したままでいいのか？

10 「うちわと涙」

幼稚園との交流会で相手してあげた園児は、ずっとメソメソしており、うちわで扇いただけで何も出来なかった。しかし実は感謝してくれていた。個性の一例か。

▼ 12 「私は、『おもてなし親善大使』」

東京都産業労働局が行う「おもてなし親善大使」育成塾（中高生対象）のパンフレットかと思紛うほどの作文。作者は東京都で中学校道徳を担当する指導教諭。あまりに濃すぎる政治色。これを道徳教科書に載せるんでしょうか！？

▼ 14 「いつも一緒に」

依存心が強く、自立心がなく、集団親和を指向する、ありがちな例が描かれ、イライラする教材。教科書に書いてあれば、これがふつうで仕方ないと受け取られるだろう。もっと自立心のある人物像を（嫌みにならないように）サラッと描いてはどうか？

15 「一房のぶどう」

おじさんは両目失明との設定だが、ぶどう農家をほんとに出来ますか？（率直な疑問）収穫の時は忙しくて大変だが、農家はそれなりに楽しいもの。労働を苦勞だと描きすぎている。農家の後継者がさらに減ってしまう。

▼ 18 「合唱コンクール」

「一人でもしらけている人がいると・・・」と合唱は確かにそうだが、ではなぜみんなが同じことをやらねばならないのか？均質化の強要は、読むだけで息苦しくなる。

例えば、聴衆役（良いところを見つけて褒める義務）やスマホで録音係（歌声を個々が確認できるように）とか、自発的に役割を持たせれば良いと思うのだが。

実社会の仕事で、全員が同じ行動をするのは（臨時の雑務以外は）思い浮かばない。もしそういう仕事があれば、直ぐに機械化、IT化される。ほとんどの仕事はチームでやるが、分担して各自が責任を持つ。

26 「アルミ缶回収」

寒い冬でも続ける、ひろし達が立派すぎる！

27 「天から送られた手紙」

雪の結晶を人工的に初めて作った話。肝心な所（うさぎの毛に所々あるコブ、そこに雪の結晶が成長した）の写真があれば良かったのに。

▼ 28 「ある元旦のこと」

ポストに掲げた感謝メッセージに、新聞配達の子がヘルメットを「さっと脱いで」礼をする。

しかしヘルメットというものはさっと脱げない、さっと脱いだならばきちんと着用していない訳で、安全上論外である。下手な作り話だと感じる。

昔からの教材のようで、「帽子をさっと脱いだ」と書いた例も見つかる。1986年にバイクでヘルメット着用が全面的に義務化された時点で、バイクを自転車に置き換えるべきであった。題材そのものに、不合理性や不道徳性（この場合は不安全性）が含まれていると台無し。

▼ 32 「生き続ける遺産 深良用水」

江戸時代なのに素晴らしいトンネル掘削工事技術！

しかし重要な部分に『捏造』疑惑あり。神奈川県の芦ノ湖から、静岡県に水を引くので、水利権からは不自然。工事当時はどちらも小田原藩だったが、廃藩置県で分かれた。その後、紛争になった際、本文中にもある「深良村名主・大庭源之丞が発案」とする古文書などを静岡県が提示して、水利権を確保。しかしこれらは最近発見された別の古文書と矛盾するため、『捏造』の疑いが濃厚。道徳教科書への掲載は憚られる。

▼ 35 「卒業文集最後の二行」

年記者の懺悔回想文。成績は良くしっかりしているが、貧しい身なりの小学校同級生へのヒドすぎるイジメ。当人が抗議しても執拗に続ける悪質さ、カンニングの言い掛かりまでつける卑劣さ、最後まで謝らないズルさ等々、読むだけで怒りに震える。懺悔と分かっている、最悪の読後感、不条理感！

全体について

最初の1「誰も知らない」は良かったのだが、嫌な気持ちになる教材が多い。特に、18「合唱コンクール」は集団行動の圧力、35「卒業文集最後の二行」は陰湿卑劣なイジメで、生徒には読んでほしくないと感じる。28、32は題材そのものに問題あり。

▼「心の扉」は各単元のフォローで、文科省22徳目に沿ったもの。良い題材でも、これを見るところを省く。

(+1-9=-8)

日本教科書・中学校道徳 1年へのコメント

(○：ポジティブ、▼：ネガティブ)

p. 16 「オレは最強だ！」

車椅子テニスプレーヤー・国枝慎吾氏。一流選手が超一流になるための精神論。身障者があそこまで出来るのは驚きだが、テニスを始めたばかりの頃の苦労話がほとんどなく、中学生には共感を得にくいだろう。本当に本人が書いたのかと疑問を感じる。

▼ p. 21 「パーソナリティー」

将来を語ったりするのは男性ばかりで、祖母、伯母は迎えるだけ。このジェンダー差は意図的か。父の実家近くの砂浜のイメージとして、水晶浜海水浴場（福井県）の写真があり、奥に見えているのは美浜原発！ 原発のある風景に慣れさせようという黒い意図か？

▼ p. 26 「志 ～幼少の記憶より～」

不自然過ぎる導入部で、無理やり吉田松陰を持ち出す。明治維新の美化と山口県の宣伝のよう。志と主人公の陸上部活動との関連も不明。

p. 30 「金星探査機「あかつき」の挑戦」

科学技術ものなのに出典が不明で、内容の正確さに疑問あり。日本の技術力は高いのか、米ロに4、50年遅れているのか、どっちなのか？ 何を言いたいのか？

▼ p. 38 「二枚のチケット」

コンサートに急ぐ電車内で、目も耳も不自由な人に遭遇し、先の駅までのケアを依頼される。不自然極まりない状況設定で、D級映画シナリオのよう。現実味が全くない。

▼ p. 44 「おはよう」

認知している人への挨拶は良いことだが、知らない人に声を掛けるのは誘拐など犯罪に巻き込まれる懸念があり、推奨すべきではない。

▼ p. 47 「いつも一緒に」

依存心が強く、自立心がなく、集団親和を指向する、ありがちな例が描かれ、イライラする教材。教科書に書いてあれば、これがふつうで仕方ないと受け取られるだろう。もっと自立心のある人物像を（嫌みにならないように）サラッと描いてはどうか？

▼ p. 56 「ちゅうたがくれたもの」

小柄でいじめられっ子だった劣等感の裏返しという、バイク乗りにありがちなパターンを描き、事故であっけなく死なすのは冷酷無情。バイク乗りへの偏見を煽るだけ。

▼ p. 66 「嘉納治五郎先生との出会い」

柔道をやってもいない子が、本を手にしただけで「運命的な出会い」と感じるはずも、「先生」と呼ぶ訳もない。不自然極まりない。

▼ p. 70 「二つの足跡」

恐竜の足跡の化石から、場面を推理し、意見の違いを調整しようと誘導。自然科学上の見解の相違は、科学的な証拠で論じるべきものであり、調整するものではない！

▼ p. 98 「グループ」

LINEでのありがちな好ましくないやりとり。望ましい対応をきちんと提示していないので、あたかもそれがふつうと生徒は受け取る懸念がある。

▼ p. 104 「プロレスごっこ」

如何にもありそうなプロレスごっこを強要するイジメ。考えよう、話し合おうだけでなく、望ましい対応をビシッと示すべし。「よくあることだよな」との印象を残すだけになりかねない。

▼ p. 120 「仕事と心」

日本文教出版1・14と同じく新津春子さんで、帰国の顛末は最小限に留め、技能協議会への挑戦を主に記述。辛い境遇でも、仕事を辛抱して誠実にこなせば陽の目を見ると、説教しているよう。中学生は未来を暗く厳しく感じるだけではないか。可能性は無限の若者には、夢を持てるような教材を示すべき。

▼ p. 141 「銅像が教えてくれたこと」

またもや不自然な設定で、陸奥宗光を登場させて持ち上げる。意図が見え見え。

▼ p. 148 「環境先進国江戸」

江戸は「国」ではなく「時代」。産業革命以前は、どこでもそのようなもので、特に日本だけ循環型とは言えない。また都市としての江戸は、もっぱら日本全域の地方の生産に依存する消費地で、江戸幕府の支配構造ゆえに成り立っていた特殊な地域であり、江戸だけでは全く循環社会にはなっていなかったことも指摘すべき。

▼ p. 153 「大地 —八田與一の夢」

日本による植民地支配の「明」側面だが、台湾の文化伝統を蔑ろにして日本化した植民地支配が非道徳的なことを語らずに済ますなら、欺瞞でしかない。それとも、本教科書は植民地支配を暗に擁護しているのであろうか？

全体について

教科書として「論外」のレベルではないか。教材の大半に粗が目立つ。8社のなかで、大差のどん尻。不自然な導入や無理な展開など突っ込み所も満載で、中学生の共感はずり得られないだろう。登場する人物4人は大日本帝国期ばかりと、偏った歴史観が見え透いている。検定に通ったこと自体が信じられない。

他社にはない、「食」をテーマにした教材が2つあるが、それらは技術・家庭か保健体育で取り上げるべきこと。